

9:2 それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。そして彼らの目の前で御姿が変わった。9:3 その御衣は、非常に白く光り、世のさらし屋では、とてもできないほどの白さであった。9:4 また、エリヤが、モーセとともに現れ、彼らはイエスと語り合っていた。9:5 すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、素晴らしいことです。私たちが、幕屋を三つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」9:6 実のところ、ペテロは言うべきことがわからなかったのである。彼らは恐怖に打たれたのであった。9:7 そのとき雲がわき起こってその人々をおおい、雲の中から、「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい」という声をした。9:8 彼らが急いであたりを見回すと、自分たちといっしょにいるのはイエスだけで、そこにはもはやだれも見えなかった。9:9 さて、山を降りながら、イエスは彼らに、人の子が死人の中からよみがえるときまでは、いま見たことをだれにも話してはならない、と特に命じられた。9:10 そこで彼らは、そのおことばを心に堅く留め、死人の中からよみがえると言われたことはどういう意味かを論じ合った。9:11 彼らはイエスに尋ねて言った。「律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていますが、それはなぜでしょうか。」9:12 イエスは言われた。「エリヤがまず来て、すべてのことを立て直します。では、人の子について、多くの苦しみを受け、さげすまれると書いてあるのは、どうしてなのですか。9:13 しかし、あなたがたに告げます。エリヤはもう来たのです。そして人々は、彼について書いてあるとおりに、好き勝手なことを彼にしたのです。」9:14 さて、彼らが、弟子たちのところに帰って来て、見ると、その回りに大ぜいの人の群れがおり、また、律法学者たちが弟子たちと論じ合っていた。9:15 そしてすぐ、群衆はみな、イエスを見ると驚き、走り寄って来て、あいさつをした。9:16 イエスは彼らに、「あなたがたは弟子たちと何を議論しているのですか」と聞かれた。9:17 すると群衆のひとりが、イエスに答えて言った。「先生。口をきけなくする霊につかれた私の息子を、先生のところに連れて来ました。9:18 その霊が息子にとりつくと、所かまわず彼を押し倒します。そして彼はあわを吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせます。それでお弟子たちに、霊を追い出すよう願ったのですが、できませんでした。」9:19 イエスは答えて言われた。「ああ、不信仰な世だ。いつまであなたがたといっしょにいないかならなないのでしょう。いつまであなたがたにがまんしていなければならなないのでしょう。その子をわたしのところに連れて来なさい。」9:20 そこで、人々はイエスのところにその子を連れて来た。その子がイエスを見ると、霊はすぐに彼をひきつけさせたので、彼は地面に倒れ、あわを吹きながら、ころげ回った。9:21 イエスはその子の父親に尋ねられた。「この子がこんなになってから、どのくらいになりますか。」父親は言った。「幼い時からです。9:22 この霊は、彼を滅ぼそうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。ただ、もし、おできになるものなら、私たちをあわれんで、お助けください。」9:23 するとイエスは言われた。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」9:24 するとすぐに、その子の父は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」9:25 イエスは、群衆が駆けつけるのをご覧になると、汚れた霊をしかって言われた。「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな。」9:26 するとその霊は、叫び声をあげ、その子を激しくひきつけさせて、出て行った。するとその子が死人のようになったので、多くの人々は、「この子は死んでしまった」と言った。9:27 しかし、イエスは、彼の手を取って起こされた。するとその子は立ち上がった。9:28 イエスが家に入られると、弟子たちがそっとイエスに尋ねた。「どうしてでしょう。私たちには追い出せなかったのですが。」9:29 すると、イエスは言われた。「この種のものは、祈りによらなければ、何によっても追い出せるものではありません。」

### はじめに

先月読んだマルコの福音書の個所で、イエスは弟子たちに十字架への道の大切さを説かれました。つまり、イエスが十字架にかかって死ななければならぬことについてです。イエスの弟子も同様に、心からイエスについていこうと思うなら、霊的に死ななければならぬと、マルコは言いました。

自分の十字架を負ってイエスについていくとは、この当時の弟子たちにとって、殉教の危険性をも意味しました。

現在でも、世界各地の多くのクリスチャンにとって、イエスについていくことは死の危険を意味します。

正常なクリスチャンの生き方とは、自らを犠牲にし、イエスについていくためにいのちをささげることであると、マルコは教えてくれます。

その内容は置かれた環境により異なりますが、共通しているのは、イエスにすべてを明け渡し、主の望まれることをなすということです。それは、たいていの場合、楽で快適な領域から飛び出すことです。

パウロはローマ 12 : 1-2 で、福音に対するあるべき応答は、このような完全な明け渡しだと教えます。

こういうわけで、パウロはローマ 1-11 章で福音を提示し、12 章から終わりにかけて、私たちの実生活に福音の働きがどう現れるべきかを述べています。

## ローマ 12 : 1-2

12:1 そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。12:2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何がよいことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

先月の学びの最後のポイントはマルコ 9 : 1 でした。

9:1 イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまでは、決して死を味わわない者がいます。」

マルコが語っているのは、十字架の後に栄光がやってくるということでした。

イエスは、9 : 1 の約束をもって弟子たちを安心させておられます。そして、その 6 日後に、変貌という体験をもって、この約束をさらに確かなものとなさいます。

今日の学びはここからです。

### 1. 神の究極の御国を垣間見る (9 : 1-8)

この体験について学び始める前に、この現象は出エジプト記 24 章の出来事と関連していることに注目しましょう。

この個所には、神の栄光がシナイ山の上にとどまったとあります。

ここに、いくつかの相似点があります。

弟子たちは、神の栄光があらわれるまで 6 日間待たなければなりませんでした。(マルコ 9 : 2)

モーセは、雲の中から神がモーセをお呼びになるまで、6 日間待たなければなりませんでした。

(出エジプト 24 : 16)

弟子たちは、神と出会うために高い山に登らなければなりませんでした。(マルコ 9 : 2)

モーセも、神と出会うために高い山に登らなければなりませんでした。(出エジプト 24 : 15)

神は、雲の中から弟子たちに語られました。(マルコ 9 : 7)

神は、モーセにもシナイ山にかかった雲の中から語られました。(出エジプト 24 : 16)

出エジプト記で、神は選ばれた民にご自身をあらわされました。

マルコの福音書では、神の栄光はイエスのうちに見られます。

旧約聖書の中に新約聖書が秘められていますが、新約聖書の中に旧約聖書が明らかにされています。

聖書はひとつの書物であり、そのすべてはイエスについて語ります。イエスが、私たちの問題に対する唯一の答えとして示されています。全人類の抱える大きな問題は、私たち全員のうちに存

在する人間の罪の性質です。これが、戦争、殺し、盗みなど、すべての罪深い行いと、社会の悪を引き起こす原因です。

では、1-8 節でどのようなことが起こったか見ていきましょう。

まず、イエスは弟子たちが「神の国が力をもって到来」するのを見ると約束をなさいます。(9 : 1)

イエスは、ご自身の正体を明かすとおっしゃったのです。イエスが人の姿をした神であることを、選ばれた弟子たちがその目で見るためです。

つまり、三位一体の第二格、御子なる神ということです。

これは、イエスが公生涯で人に見せるために栄光をあらわされた唯一の記録です。

ですから、この箇所は特別であり、しっかり検証する価値があります。

これはイエスによる非常に偉大な約束でした。弟子たちは、何が起ころうとしているのか、全容を理解してはいなかったのではないのでしょうか。

弟子たちは、6 日間待たなければなりませんでした。そして、イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネだけを選ばれ、高い山の上に連れていかれました。

なぜ、ペテロとヤコブとヨハネだけなのでしょう。

マルコは、誰がイエスに仕えるかはイエスがお決めになると語ります。

ペテロは最年長者で、後に教会創立にあたって大きな役割を果たすことが分かっています。

ヨハネは最年少者で、イエスの愛した弟子と言われています。

ヤコブは、働きを始めてまもなく殉教しました。彼が勇敢な弟子だったことは確かです。

イエスが彼らを選ばれたのは、このすばらしい体験をとおして誰がもっとも恩恵を受けるかをご存じだったからでしょう。

私たちは神のみことばを頼りにすべきであって、体験や感情に頼るべきではありません。一方、神と出会ったすばらしい体験をした人たちは、イエスから離れて信仰を失うことはあまりありません。そういう人たちは、ずっと神に仕えます。

私自身、このような経験は、聖霊が送られたリバイバルのときに神と出会う体験をした人たちとお会いしたことです。

このような人たちは、神の栄光を経験したことで、それ以前とはまったく変わりました。

ルカの福音書 12 : 35-48 で、イエスは忠実なしもべと悪いしもべについて語られます。

そして 48 節で、「すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されま

す。」とおっしゃいます。

神は私たち夫婦に、この箇所をとおして 1985 年に語られました。

神は、イエスによる救いを神からの賜物として与えてくださいました。

神は、私に仕事を与えて必要を見だし、住む家を購入できるようにしてくださいました。

神は、私たちの長男アンドリューという賜物を与えてくださいました。

そして 1985 年、私たちは、神に従うために信仰によってそのすべてをささげるようにと神に召されました。

後悔はありません。これまで、やりがいのある 32 年間でした。

体験も役には立ちますが、私たち夫婦は常に、神のみことばを信頼するよう努めてきました。私は、皆さんにもそうするようにお勧めします。

では、実際の変貌の目撃体験の箇所に入ります。そこで何が起こったのでしょうか。

マルコ 9 : 3-4

9:3 その御衣は、非常に白く光り、世のさらし屋では、とてもできないほどの白さであった。 9:4 また、エリヤが、モーセとともに現れ、彼らはイエスと語り合っていた。

ペテロは、何と書いていいかわからず、モーセとエリヤとイエスのために幕屋を 3 つ造りましようかと提案しました。

マルコ 9:7 そのとき雲がわき起こってその人々をおおい、雲の中から、「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい」という声がした。

この出来事の後、モーセとエリヤの姿は消えて、元の姿に戻ったイエスだけがおられました。これで終わりです。どういう意味があるのでしょうか。

9 節で、イエスはペテロとヤコブとヨハネに、イエスが死人の中からよみがえるときまではこのことを誰にも言わないようにと命じられました。

死人の中からよみがえるとはどういうことか、弟子たちにはわかりませんでした。とにかくそのことを自分たちの間だけに留めておきました。

この出来事の裏にある教えをひもといていきましょう。

イエスの栄光があらわされたときに現れたふたりの人物は、モーセとエリヤでした。

(これは、モーセにとって約束の地への第一歩でした。)

モーセは律法の象徴です。トーラーと呼ばれる聖書のはじめの 5 つの書の著者です。

エリヤは預言者の象徴です。

このふたりの働きは、イエス・キリストによって完全に成就しました。

#### ヘブル 1 : 1-2

1:1 神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、 1:2 この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。

イエス・キリストが人なる神であることは、旧約聖書全体が支持します。

山上の変貌は、旧約聖書がイエスを指し示すこと目に見える証でした。

ペテロとヤコブとヨハネがユダヤ人であったことを忘れてはいけません。彼らは少なくとも、トーラーや預言の一部を知っていたはずで

幼いころから、旧約聖書を教わっていたでしょう。

旧約聖書全体がイエスを指し示していました。そのことをこの 3 人に理解させることを神は明らかに望まれたのです。

神は、ユダヤ人としての育ちや文化を弟子たちが無視することを望まれません

イエスが旧約聖書の律法の成就であると気づいてほしいと思われたのです。

イエスは唯一、十戒を守れる完全な人でした。

だから、弟子たちはイエスを信頼しなければなりません

ここで、マラキ 4 : 4-6 のみことばについて考えてみましょう。

#### マラキ 4 : 4-6

4:4 あなたがたは、わたしのしもべモーセの律法を記憶せよ。それは、ホレブで、イスラエル全体のために、わたしが彼に命じたおきてと定めである。 4:5 見よ。わたしは、【主】の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。 4:6 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。」

この箇所が 9 : 12 のイエスのことばと関連していると信じる聖書学者もいます。

多くのメシアニックジャー（ユダヤ人のクリスチャン）は、神によるこの世の裁きの日が来る前に、モーセとエリヤがユダヤ人に伝道する神の伝道者として戻ってくると信じています。クリスチャンの中にも、そう信じる人もいます。

これは、この箇所と確かに合致します。しかし、神が弟子たちに教えようとなさっている主なポイントではありません。

主要ポイントは、イエスが神に愛された御子であるということと、弟子たちがイエスの言うことを聞かなければならないことです。

これは、マルコの福音書の全体のテーマと一致します。

マルコ 1 : 11 で、バプテスマのヨハネがイエスに洗礼をさずけたときにこのようなことがありました。

1:11 そして天から声がした。「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」

マルコの福音書のテーマを挙げるとするならば、「神に愛された御子イエスを信じなさい」です。

では、今日の個所の後半に入ります。

## 2. 弟子としてイエスに頼ることへの召し (14-29 節)

イエスはペテロ、ヤコブ、ヨハネとともに山の上の変貌の体験から戻られると、弟子たち全員に、弟子としてイエスに頼るといふ大切なことを教えられました。

これは、すべてのクリスチャンが学ぶべき教えです。

14-29 節は、イエスの弟子たちと律法学者たちが論じ合っているところにイエスが来られた場面です。

ここで論じあっていた内容は、悪霊にとりつかれていると見られる少年から、弟子たちが悪霊を追い出せなかったことについてでした。

少年の父親は、イエスにそのいきさつを説明しました。

マルコ 9 : 17-18

9:17 すると群衆のひとりが、イエスに答えて言った。「先生。口をきけなくする霊につかれた私の息子を、先生のところに連れて来ました。 9:18 その霊が息子にとりつくと、所かまわず彼を押し倒します。そして彼はあわを吹き、歯ぎしりして、からだをこわばらせます。それでお弟子たちに、霊を追い出すよう願ったのですが、できませんでした。」

イエスは、少年から悪霊をすぐに追い出すことはなさらず、まずいくつか質問をされました。そして父親に、神は少年を癒すことができると信じるよう呼びかけられました。

24 節には、イエスに向けた父親の祈りの言葉が記されています。

マルコ 9 : 20-27

9:20 そこで、人々はイエスのところにその子を連れて来た。その子がイエスを見ると、霊はすぐに彼をひきつけさせたので、彼は地面に倒れ、あわを吹きながら、ころげ回った。 9:21 イエスはその子の父親に尋ねられた。「この子がこんなになってから、どのくらいになりますか。」父親は言った。「幼い時からです。 9:22 この霊は、彼を滅ぼそうとして、何度も火の中や水の中に投げ込みました。ただ、もし、おできになるものなら、私たちがあわれんで、お助けください。」 9:23 するとイエスは言われた。「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」 9:24 するとすぐに、その子の父は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」 9:25 イエスは、群衆が駆けつけるのをご覧になると、汚れた霊をしかって言われた。「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしがおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな。」 9:26 するとその霊は、叫び声をあげ、その子を激しくひきつけさせて、出て行った。するとその子が死人のようになったので、多くの人々は、「この子は死んでしまった」と言った。 9:27 しかし、イエスは、彼の手を取って起こされた。するとその子は立ち上がった。

この奇跡で注目したいのは、父親の信仰と弟子たちが悪霊を追い出せなかったことです。

父親は、イエスを信じ切っていました。彼は正直で、必死でした。

イエスは、もし信じることができたなら、息子の癒しは可能だと約束なさいました。

弟子たちは、なぜ少年から悪霊を追い出すことが自分たちにはできなかつたのかとイエスに尋ねました。イエスは 29 節でその問いに答えておられます。

9:29 すると、イエスは言われた。「この種のもは、祈りによらなければ、何によっても追い出せるものではありません。」

イエスのことばから、弟子たちは祈りと断食をちゃんとできていなかったことが伺えます。新改訳には 29 節に「祈り」としか記されていませんが、聖書の脚注には「断食」が補足として記されています。また、「祈りと断食によらなければ」と訳された聖書もあります。イエスは「祈りと断食」とおっしゃったと私は考えます。

ユダヤ人は祈りの習慣を厳しく守っていましたが、断食はさらに真剣な祈りのときであり、仕事をしているなど、体力の必要なときにはできません。

ただし、ここで呼びかけられているのは、弟子としてイエスに頼ることです。

私たちが聖霊の助けを得てイエスに仕えるとき、人を癒すでも、霊的な問題や日常的な問題を解決するでも、イエスの力に頼らなければなりません。

それには、祈りと断食が必要なことがあります。

科学的に実証されてはいませんが、祈りと断食によって、私たちはイエスと聖霊の近くに引き寄せられ、難しい状況でも主にお仕えることができるように備えられます。

祈りと断食は、使徒の働きでは日常の働きの一部でした。

聖書は、「もし断食するなら」とは書いていません。「断食するとき」と書いています。

もうひとつ大切なことは、祈ったり、祈って断食したりして、その答えとして何かが起こったなら、神の栄光を称えましょう。

「私がいなかったら、これは実現しなかつただろう。」

神に仕える奉仕者の口から、そんな言葉は聞きたくありません。

癒しであろうが、牧師や奉仕者など教会の誰かを任命することであろうが、すべて、働きをなしとてくださるのは神です。

私たちはただ、神の御手の中にある器であり、すべての栄光を受けるのは神でなければなりません。

イザヤ 42:8 わたしは【主】、これがわたしの名。わたしの栄光を他の者に、わたしの栄誉を刻んだ像どもに与えはしない。

今日、私たちは神の栄光をたたえます。イエスを十字架上で死ぬためにこの世に遣わして下さった神をたたえます。それは、来たるべき神の御怒りから私たちが救われるためです。

今日、私たちは、イエスによる救いを覚え、神に栄光をおさげします。

聖餐式は、私たちの功績をたたえる場ではありません。神がなして下さったことに感謝をささげる祝いです。

では祈りましょう。